

ちよつといし話

～ 善入院の歴史と六道巡り ～

善入院の御本尊善光寺如来様は、越後の国（新潟）高田の城主夫妻の深い信仰心から、信濃（長野）善光寺、本堂前の階段に忽然と現れたのです。ゆえに作者はなく、密像佛として安置されており、12年に一度御開帳されます。戦乱の世、この善光寺如来様は東京、芝の増上寺に祀られました。時を経て、善入院住職が長いこと増上寺にて学問の指導教官をされ、その時の縁で現在善入院の本尊として、お祀りをさせていただいております。閻魔大王の縁起によりますと、『ここに一人の男あり。その名を時丸と言う。時丸は、娑婆世界にあって、悪業の日々を送る。ある日、病で無く頓死し、閻魔の庁に至る。その時、閻魔大王声をあらげて「汝、佛法流布の世に生まれながら、一句の法、一行の経をも聞かず、称えず、日夜常に悪業をつくりしは、己が身の不覚なりとしかりたもう。」その御声は、百千の^{いかずち}雷の同時に落ちかかるがごとく響きければ、時丸恐ろしさのあまり、ただただ後悔の涙を流すのみなり。獄卒（獄役人）時丸をつかみて、^{ふつとう}沸騰する釜の中に投げ入れんとする。その時、不思議なるかな^{こくう}虚空より光明輝き来たり。その光明の内より、自然^{じねん}の声あり。この者は、「一光三尊善光寺如来に結縁せし者なり」と告げたまひける。閻魔大王これを聞いて、不審に思い、冥宮に時丸の一生を調べさせたもう。しかるにその事実なし。その時、時丸閻魔大王に申して^{いわ}日く、「私が母の胎内に宿りし時、母が善光寺如来様に詣でし事、たびたびありと、母より聞かされておりました。若しや善光寺如来の大慈大悲かかるわずかな結縁をも捨てたまわぬや」と申しければ、閻魔大王座を立ちて時丸を礼し、そのまま娑婆にもどしたまえり。時丸^{かえ}甦りて後は、信心厚く善行につとめ、めでたく往生を上げた。』と伝えられています。

現在、善入院の本堂にて四月の地藏大祭に六道巡りの最後に閻魔大王の御印を善光寺如来様から頂くのは、これ即ち、如来結縁の印信が各人に与えられる事になります。この事は、時丸の故事に因るのです。